

遼寧省複州湾干潟におけクロツルの越冬

張 跃文・徐克
訳 福井和二

Wintering Cranes on The Beach of Bohai Bay, China
In the past, people believed that cranes (*Grus grus*) were migratory birds in the Liaoning Province of China. However, after a 4-year study, we found that this was not the case. Actually, the cranes overwinter in the Fuzhou Bay of Bohai in Liaoning Province, and the wintering period can last for about 5 months. The birds gather on the beach in numbers which vary between winters. They feed upon maize, grass roots or stems during the winter.

概要；クロツルは遼寧省においては通過する旅鳥と認められている。しかし、遼寧省渤海の複州湾干潟において越冬するクロツルを4年間観察した。越冬期間は約5カ月、個体数は毎年一様ではなく、トウモロコシ、草の根、茎等を採食している。

クロツルは中国に生息するツル類のなかでは最も普通に見ることができる種である。台湾と青海省を除くその他の各省にいずれも分布している。クロツルはロシア、中国の新疆省天山北部、黒龍江省^{リンゲン}林甸、内蒙古自治区^{ネロンバイ}呼倫貝爾湖などで繁殖する。越冬地は中国の長江流域以南および山西省などであるが、河北省、山東省威海、榮城、即墨などでも時折見られる。クロツルは遼寧省では通過する旅鳥として認められており、今まで全く越冬の記録がなかった。

1991年1月、遼寧省瓦房店市三台浦満州族自治郷の水田で20余羽が採食しているところを発見された。この後、遼寧省綏中県の二河口、王宝山、興城の媽蟻屯、大車山等の地で次々と7～15羽のクロツルの越冬が見られた。これらの発見は、クロツルの分布の研究に重要な価値があると考え、筆者らは1992年10月下旬より1995年4月の間、三台郷におけるクロツルの越冬状況を観察した。結果は以下の通りである。

自然概況

遼寧省瓦房店市(39° 7' N, 121° 9' E)は遼東半島の中西部に位置し、温帯北部の湿潤な季節風性の気候で、年平均気温9.4℃、1月の平均気温-7.8℃、最低気温-25.1℃、7月の平均気温24.1℃、最高気温34.1℃、年平均降水量656mmで7、8月に集中して降雨があり、無霜期間は約157日である。

瓦房店市三台郷は渤海複州湾の複州河河口部にあり、複州河の流れと満ち潮が混ざり合うことにより、この部分は周年凍ることがない。60年の初めまで、ここに大きな干潟があり、ヨシなどの塩分に強い植物に覆われていたが、60年中期頃より相次いで開発が始まり、数万アールの塩田、蝦養殖場、水田などに変わった。ただ、潮が引いた後に大小幾つかの干潟が残り、各種の水鳥がここを休憩場、或いは採食場として利用している。干潟の上には複州河の水が年中灌流し、冬季は水が澄み、雨期には増水し流れが急となる。河の両岸は平坦な耕地が続き、河の近くでは水稻が多く作られ、その他の畑地ではトウモロコシ、豆類、甘藷、落花生および冬小麦が作付されている。

渡りの時期と数

クロツルは毎年10月下旬から11月上旬にかけ、繁殖地からこの地へ渡って来て、越冬するものあり、しばらく留まりさらに南へ渡ってゆくものもある。われわれが観察した4年間で、最も

早いクロツルの渡りは1992年10月20日、最も遅くは1993年11月4日で、1994年と1995年は11月2日と10月28日であった。その数は26~95羽の間で、その後次第に数を増し、1993年11月19日250羽、11月30日360羽、12月5日同一場所で850羽を観察した。クロツルの渡りのピークは11月下旬から12月初旬で、1992年、1994年、1995年は400~500羽の間であったが、1993年12月9日には約2000羽のクロツルの一群が見られた。南に向かって渡りをする途中、当地を經由するクロツルの群れは、1992年には11月15日に渡りを終り、1993年には12月25日に終了した。1993年12月15日に調査を行なった時は、クロツルの大群はすでに見られず、300余羽のクロツルが収穫の終わった水田に、2群に分かれて採食していた。

春になって、当地で越冬しているクロツルは3月下旬、南から北へ向かって次々と繁殖地へ渡ってゆく。過去4年間の野外観察では、最も早く北へ飛び立ってゆく日は、1992年は3月25日、1993年は3月28日、1994年は3月26日、1995年は3月29日で4月7日まで続いて終了した。渡りのピークは3月の末であった。クロツルの北への渡りを開始するときの行動は、厳冬時と比べると明らかに変化がある。彼らは小群であったものが次第に大群を作らなくなり、採食時間が減少し、頻繁に飛び上がったたり下りたりし、しばしば、高空を旋回し、また田圃に立っていつもより長時間鳴き続ける。

1993年3月28日観察した一群のクロツルは四五回繰り返し飛翔して鳴き交わし、その間に、他の個体も加わって次第に群れの数が大きくなり、約2時間後激しい鳴き声を交わしはじめ、その後続々と飛び立ちはじめる。すべてが飛び立つころには上空を旋回している群れが、次第に高度を上げ、約10分後には“人文字形”に整列し、西北方向へ飛び去った。その数207羽、時間11:30amであった。

越冬数および越冬期

毎年、この地に越冬するクロツルの小群あるいは大群(表1)は、河の両岸の水田で活発に行動している。厳冬時にも近辺の麦、トウモロコシ、マメなどの畑地および荒れた草地に侵入し、また、日が暮れると群飛して、近くの海岸のエビ養殖場や水田に入り夜を過ごす。

渡って来た当初のクロツルはナベツル(*Grus monacha*)、ヒシクイ(*Anser fabalis*)、サカツラガン(*Anser cygnoides*)、アカツクシガモ(*Tadoma ferginea*)などの鳥と混群を作り水田で採食している。また潮間帯の干潟にオオハクチョウと一緒に休息し、敏感に警戒する他の種の慌ただしく、声高な鳴き声に驚いて飛び立つのを見ることがある。次第に渡来数が増えたクロツルは単独に大群をつくり行動するようになる。このような現象は渡りの最盛期に顕著に見られ、他の種類の鳥が少数混在することがある。

1993年12月9日9:00、100haほどある水田で2000羽近くのクロツルを観察した中に7羽のナベツル、3羽のアオサギ、8羽のコウノトリと一緒に採食していた。接近する羊の群れと牛車を恐れる様子もなかった。約11:16ころ、このクロツルの一群は、人の接近に驚いて飛び立ち、長い間上空を旋回し、その鳴き声は2kmも遠くで聞くことができた。まさに“鶴の鳴き声、千里に及ぶ”と言われている通りである。翌日早朝、クロツルと羊はいつものように混在していた。牧童が先にたって羊の群れを誘導すると、多くのクロツルが脅威を受けて、鳴きながら上空を旋回する。しかし、少数のクロツルは元のまま水田に止まり、頸を高くして辺りを警戒している。牧童が去るのを待って、上空を旋回しているクロツルが次々と地上に降りて採食をはじめ、数日連続して観察したところでは、採食に使っている時間は一部であるが、長時間その水田を離れようとしな。筆者は牛車に乗って接近を試み、クロツルの約50mの位置で観察し、撮影をした。この時クロツルは採食を止めて、頸を伸ばし、牛車の進行を注目していた。牛車がちょっと止る

と、クロツルはすぐさま飛び立った。もしも、牛車が止らずに進んでいたらクロツルは牛車が遠ざかるのを見送って採食を続けたであろう。

この調査を通して知り得たことは、毎年10月下旬から11月下旬にかけてクロツルが渡来し、一部のクロツルが継続して越冬し、3月末から4月初めに繁殖地へ向かった去って行く。その期間は約5カ月ほどである。最も滞在期間の長かったのは1992年の冬で162日、最も短かったのは1993年冬で152日であった(表1)。

表1 クロツルの越冬個体数

1992年		1993年		1994年		1995年	
月/日	数羽	月/日	数羽	月/日	数羽	月/日	数羽
10/25	26						
11/ 9	400	11/ 4	50	11/ 2	95	11/ 9	228
12/24	48	12/ 9	2000	12/ 8	550	12/ 3	580
1/17	52	1/18	321	1/ 8	168	1/10	226
2/ 3	32	2/ 9	305	2/ 5	146	2/20	222
3/15	49	3/ 4	307	3/17	145	3/18	200
4/ 7	7	4/ 6	23	4/ 5	18	4/ 3	22

ここでのクロツルの越冬群の行動は、少なくて3~5羽、多いときは100羽を越え、通常30~50羽の群れが見られる。早朝6:00ころ、彼らは海辺のねぐらを飛び立って秩序ある隊列を組み、西から東へ、南へ、北へと3方向の耕地へ飛んで行き、採食を始める。9:00~15:00の間が最も活動が頻繁となる。その場所には多くの糞便とはっきりとした足跡が密集して残されている。天気の良い昼時、数十から百以上のクロツルの群れが羽を広げて高空を飛ぶ様を良く見かける。14:00ころクロツルは採食地を飛び立ってねぐらへ向かう、17:00、空が暗くなってからでもねぐらへ帰ってくる群れがある。もし、風が吹き、雪が降る荒天のときも、彼らはやっぱり大群で開けた採食地へ向かい、採食したり立ち尽くしたりしているが、その行動時間は短い。1992年12月22日午後まで大雪が降り、雪は大地を覆い尽くした。クロツルは依然耕地内で採食活動を続けており、田の畔などに積もった雪を脚でかき分けて植物の茎根を啄んだ痕跡が残っていた。厳寒時のクロツルの行動様式は渡来初期と比較して変化が現われる。彼らは大群から4~14羽の小群に分かれて行動するようになる。好んで秋耕の終わったトウモロコシ畑や大豆畑、小麦畑、落花生畑に入り、さらには蔬菜畑にも侵入するようになる。時には夜明け時、3~5羽が住宅から150mも離れていない果樹園で採食することもある。住民が見ていても恐れて飛び去ることもない。

毎年1月の観察によるクロツルの個体数は52~321で、1993年が最も多く321羽(幼鳥31羽)であった。1995年は226羽(幼鳥29羽)、1992年が最も少なく52羽(幼鳥5羽)で、90%以上が成鳥(亜成鳥を含む)であった。

越冬クロツルの食物について、われわれは1992年12月5日傷を受け死亡したクロツルのそ囊からは2粒のトウモロコシ、7粒の粉、他に少量の根茎が認められたほかは分別不能な植物が少量有ったのみである。1993年2月19日綴中県六股河付近の斜面にある甘藷畑で死んでいたクロツルが甘藷を食しているのを見た。1995年2月8日死亡したクロツルのそ囊と胃から採食したばかりの落花生とオナモミ、ニンジンボクの根と水草などが見られた。